The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 『うつほ』の仲澄 : 作り物語の手法と指向 |
| Author(s) | 加藤, 昌嘉 |
| Citation | 詞林. 2002, 32, p. 1-12 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/67488 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 『うつほ』の仲澄

## ―作り物語の手法と指向―

加藤　昌嘉

### Ⅰ　物語史のなかの仲澄（なかずみ）

『うつほ』の仲澄は、実の妹あて宮に恋慕し、報われぬ想いを抱いたまま煩悶のうちに死んでゆく人物であるが、『源氏物語』以後に作られた、いわゆる平安後期物語・中世王朝物語を読んでいると、この仲澄に出くわすことが、間々ある。

【イ】［春宮］「かく痩せそこなはるばかり思ふらむこととこそ心得たれ。仲澄の侍従がまねしたまへるなめりな。[1] 人もさぞ語りし。……」とまめやかにのたまはするを、［狭衣中将］「人の問ふまでになりにけるよ」と、いとど苦しけれど、　（『狭衣物語』巻一／新潮日本古典集成・五六頁）

【ロ】よろづに勝れ給つらん女の御あたりには、まことの御兄ならざらん男は、むつまじくもてなさせ給まじかりけれ。早うは、仲澄の侍従・宰相中将などの例どももなくやは。[2]　（『狭衣物語』巻一／日本古典文学大系・三一頁）

【ハ】中納言［＝秋の中納言］のもとより参らせられたる『うつほ』のゑなりけり。［木幡の姫君は］尼上にことばよませて見給。……『うつほ』のゑを参らせ給へるも、［伊予守は］ことしもこそあれとおもひあはせられて、なかずみの侍従に思ひよそへ給にやと、心のうちにあんぜらるゝも、

（『石清水物語』／鎌倉時代物語集成・四三～四五頁）

【ニ】［関白 恋路は］女御［＝養女 梅津の妹君］の御あつかひさへ物うくおぼしなられて、よろづをば、うちのをとゞ［＝内大臣 端山］にのみ、いとゞゆづりきこゑ給て、「……あかざりしゆかりは［＝梅津の姉君への想いが叶わぬのに託けて］、中ずみのじゞうをもまねび給はずやは」との給みだせば、

（『恋路ゆかしき大将』巻五／鎌倉時代物語集成・三二一頁）

【ホ】［若君］「それ［＝大将の妻 一品宮］もよくをはすれど、これ［＝大将の妹 宣耀殿女御］はなをたぐひなくこそ。君に、給へるは、はらからな」との給。いみじうわらひ給つゝ、［右大将］「『この人がたれよりもうつくし

う思ひきこゆる」と申侍は、中ずみのじゞうがまねやせんずらん、心のすゑこそうしろめたけれ。……」

（『風に紅葉』巻一／鎌倉時代物語集成・四六五頁）

狭衣中将が、妹に等しい女性源氏宮に恋心を抱き続けるのは周知のところだが、【イ】【ロ】は、それを『うつほ』の仲澄に準えたくだり。【ハ】は、秋の中納言が、想いを寄せる腹違いの妹木幡の姫君に『うつほ』の絵を送る場面。しかも、その様子を「仲澄にことよせたか」と見る伊予守も、姫君と兄妹のように育てられながら、これを恋慕している。【ニ】は、腹違いの妹に恋情を移すでないぞと、主人公が友人を揶揄したもの。【ホ】は、姉のごとき存在である女御を誰よりも美しいというなんて、と冗談交りに弟分を咎めた主人公の言。――つまり、『うつほ』の「仲澄」は、近親相姦禁忌の徴として使われてある。

もちろん、【ハ】【ニ】【ホ】は、『狭衣』の影響下にあるとも目されるし、一方、この他に、あて宮や仲忠の名を出す物語もありはするのだけれども、[3]やはり、仲澄による妹恋慕は、『うつほ』の中でもとりわけ印象深いものとして或る時代に享受されたと考えてよかろう。これらの物語は、仲澄の挿話を一つの範型として援用し、己の物語の人物相関図に重ね合せているわけである。

しかし翻って見れば、こうした方法は、『うつほ』の後半部が、既に事としたものではなかったか、と思われるのだ。

## Ⅱ　回顧される仲澄――祐澄に於ける

仲澄は、「あて宮」巻で悶死してしまう人物であるが、以後も、『うつほ』後半部の巻々は、これを幾度となく招喚し、その存在を想起せしめている。

まず、「蔵開・上」巻。『うつほ』は、物語の新たな始発に際し、かなりの紙数を割いて、故仲澄を回想・追悼する場面を設えている。

【A】［あて宮］「いま一、人にはきこえで、心ちにいみじくかなしとおもふ事もありや[4]」　宰相［＝祐澄］、「なに事か。もし、すけずみが気しき見給へしことか」　［あて宮］「いで、いかでか見給はん。人のしるべきにあらずや」

［祐澄］「いで、されど、いとよくしりて侍。さはきこえんに、じゞうのうへに侍らずや。つねにさみ給へき。御とくにそこなひ給てし人ぞかし」　女ぎみ、「つねに、ゆめにぞ見え給や」との給まゝに、なきたまふ。宰相のきみもなき給て、　（蔵開・上／α五六二頁・β一〇三頁）

今なお心の内に哀しく思う隠し事があるという妹あて宮に対し、兄源祐澄は、それは、「じゞうのうへ」すなわち仲澄のことではあるまいか、と指摘する。すると、あて宮は、

【B】「なにかは。しり給へれば。まだちゐさかりし時、さうのことならはしゝころなん、あやしくおもはぬやうな

る［仲澄の］けしきなんみえし。[5] さて、としごろ、［仲澄は］なきうらみ給しかど、［私は］みしらぬやうにてやみにしを、［春宮のもとに］まいりてのちにも、かゝるふみをなんたまへりし」とて、とりていで、みせたてまつりて、

（蔵開・上／α五六二頁・β二〇四頁）

と告白し、まだ幼い時分に兄仲澄が自分に懸想して来た様子から、春宮入内が決ってもなお恋文を寄越して来た次第までを語るのであった。直接にそうした話を聞いた祐澄は、次のようにいう。

【C】宰相［＝祐澄］、［［仲澄は］心のいとみさほに、かしこかりしかば、身をいたづらになして、こともいださずなりにけるにこそ。すけずみらは、ことのふでう［＝不調］の、おぼえぬわざ〳〵はしてまし。あるは、まだ宮［＝春宮］にまいり給はざりしそのとしのあきごろ、さやうならん人もがな、とはおもひ侍りし」との給へば、きみ［＝あて宮］、うちわらひ給て、「なき人の御やうにこそ。かのきみ［＝仲澄］は、物をおもひしけにやあらん、［夢では］みのくるしきことなんみえ給」

（蔵開・上／α五六三頁・β二〇四頁）

仲澄は心が堅固で思慮ある人物だったために、「身をいたづらに」なし、あて宮への想いを秘めたまま死んで行った、と祐澄は説きつつ、自分であったら良からぬ行動に出ただろうにと吐き、さらに、入内前のあて宮は理想の女性であったとさえいうのである。この不穏な発言については後述するとして、続く場面を見よう。

祐澄は、両親のもとへ行き、故仲澄があて宮の夢に現れるという話を報告する。

【D】［祐澄］「……こじゝうの、ふじつぼ［＝あて宮］の御ゆめに、思ひのつみに、みちならぬやうにみえ侍る」など申給。おとゞ［＝正頼］、「なにごとかは、さは思ひけん。……」［祐澄の］御いらへ、「をのこは、をんなにつけてのみこそは」［正頼］「この中には、たれかは」……おほみや［＝大宮］、心をえ給て、「さは、さなりけり」とおもほして、いみじうなき給。……「……すべて、よくもあれあしくもあれ、おとこ女にてぞあるべかりける。……」おとゞ［＝正頼］、「一宮なりけん。それぞ人におもはれぬべきさまし給へる」

（蔵開・上／α五六四頁・β二〇六頁）

父源正頼・母大宮は、仲澄が誰に心を傾けていたのか忖度するのだが、正頼が「一宮［＝仲忠の妻女一宮］なりけん」と推測するのに対し、大宮は「心をえ給て」、息子仲澄のあて宮恋慕を察し、「すべて、よくもあれあしくもあれ」、男女別々に育てるべきであったという。そして、この一連のくだりは、以下のように結ばれる。

【E】宰相のきみ［＝祐澄］、おかしとおもへど、かたわらいたければ、申給はず。このきみ［＝祐澄］、一のみやを

いかでとおぼしける。いまは、かの君をいかでかとおぼせど、きこえよるべくもあらねば、心ひとつにおぼす。さて、「この人［＝仲澄］のために、なを、ずきやうなどせさせ給へ。そのずきやうのふみには、なを、【おもひのつみのがらかし給へ】と、右大弁すゑふさのあそんにおほせごとのたまひて、ぐはんもんかきて、せさせ給へ」ときこえて、たちたまひぬ。……かくて、侍従の君のために、四十九日に、ぬのな、むらづゝ、ずきやうにせさせ給。

（蔵開・上／α五六五頁・β二〇七頁）

右のような次第で故仲澄の追善供養が執り行われるわけだが、いま問題にしたいのは二重傍線部である。諸註は「かの君」を直前の「一のみや」と同じと見、この文を、祐澄から女一宮への叶わぬ恋情を述べたもの、と解しているようである。確かに、祐澄の女一宮への懸想は「蔵開・中」巻以降で語られる事柄ではあるのだが、そう解しては、ここが前後の文脈から浮いてしまう。また、女一宮を「君」と称するのも不審である。

この文は、「一のみやをいかでとおぼしける」という過去形から、「いまは、かの君を」へと転換するのであるから、「かの君」は、女一宮以外の別の女性、すなわち、あて宮を指していると考えるべきではないだろうか。つまり、ここは、「祐澄は、女一宮を何とかして自分のものにとお思いになっていた。今は、あの人＝あて宮を何とかしてとお思いになるが、いい寄ることも出来ぬので、心の内でだけ想っていらっしゃる」と解するのがよろしい。そして、こう捉えることで、【A】～【E】はより有機的に連繋する。

【C】で、祐澄が、「ことのふでうの、おぼえぬわざ〳〵はしてまし」と、無体な振る舞いをしかねぬ気持を述べ、「まだ［あて宮が］、宮［＝春宮］にまいり給はざりしそのとしのあきごろ、さやうならん人［＝あて宮のような女性］もがな、とおもひ侍りし」とさえいっているのは、軽口の態ではありながら、祐澄の恋情を真率に表しているだろう。そして、それに対する、「なき人［＝仲澄］の御やうにこそ」というあて宮の言は、機智的返答ながらも、図星を指したものとなろう。また、【D】で、兄弟姉妹であっても男女を隔てて育てるべきだったと母がいい切り、仲澄の恋の相手は女一宮だったのだろうと父が誤解するのを聞き、【E】で、「おかしとおもへど、かたわらいたければ、申給はず」とあるのは、祐澄が今まさに、妹あて宮に叶わぬ想いを抱いているからだろう。さらにまた、【E】の、「おもひのつみのがらかし給へ」という願文は、故仲澄のために草されたものでありながら、同時に、祐澄が己の妹恋を祓うためにも機能するといえるだろう。

確かに、祐澄は、「みこふさひ［＝皇女好き］」などといわれ、「蔵開・中」巻から「国譲・下」巻にあっては、息子宮はたを使って女一宮に懸想文を送ったり、弟近澄とともに女二宮の掠奪をもくろんだり、源実忠の北の方にいい寄ったりな

どしており、あて宮を恋う様子は窺えないのではあるが、少なくともこの段階に於いては、妹恋に死んだ兄仲澄の後を継ぎ、あて宮に想いを寄せる新たな存在者として布置せられてあった、と思しい。

続く「蔵開・中」巻に於いても、故仲澄は、祐澄と関連づけられて想起されている。次に挙げるのは、仲忠とその妻女一宮との会話。

【F】大将［＝仲忠］、「さて、［問題なのは、宮はたの］ち、ぬし［＝祐澄］ぞ」　宮［＝女一宮］、「それは、さも見えぬものを」　大将、「あなかま。御をぢたちは、みなさる心［＝近親同士の恋愛は禁忌だという倫理意識は］なきものなり。一人はいたづらにもなされぬめりき。たれにかあらん、さばかりものをおもふめりしは」　みや［＝女一宮］、うちわらひて、「あやしきぬれぎぬなりや。ことすぢにこそ見ゆめりしか」

（蔵開・中／α六一〇頁・β一六三頁）

仲忠は、宮はたから、その父祐澄が女一宮に宛てた懸想文を託されており、妻女一宮に祐澄との関係を問いただそうとしている。女一宮は、叔父に当る祐澄にさような気はないと否定するのだが、仲忠は、女一宮の叔父たちはたとえ姪であっても恋情を持つだろう、という。このとき、祐澄から故仲澄へと連想が及んでいることに留意したい。仲澄は「いたづらにもなされぬ」＝身を滅ぼしてしまったが、それは、姪である女一宮に想いを懸けてのことだったのではないか、というのが傍線部の趣意であろう。思えば、先の【C】でも、故仲澄は「身をいたづらに」なした、と語られていた。「いたづら」は、「嵯峨の院」巻四例、「あて宮」巻三例、「蔵開」巻二例というように、恋に惑溺する仲澄に取り付く、一つの鍵語である。

仲忠の猜疑に対し、女一宮は、それを「ことすぢ」だと反駁するのだが、この話題は、「蔵開・下」巻、仲忠とその父藤原兼雅の会話でも再び俎上に載せられる。

【G】をとゞ［＝兼雅］、「じじう、たれよりかは。もし宮［＝女一宮］か」　大将［＝仲忠］、「しらず。気しきみ給へむとてものせしかど、［女一宮は］『ことすぢこそ』となむ。［仲澄は］よるひるあそび、物おもひいりしかば、かくよのみじかゝるべかりければにや、とこそ見給へしか」

（蔵開・下／α六五七頁・β四五頁）

先に見た【D】直後では、源正頼が故仲澄の相手を「一宮なりけん」といっていたが、ここでも、兼雅は同様の推測をしている。

このように、「蔵開」巻に於いては、女一宮が仲澄の恋い死にの原因であったと人々の間で考えられているようなのだが、これは、【A】～【E】で考察した祐澄の問題と連動しているだろう。つまり、「蔵開」巻は、祐澄→あて宮という恋慕を、徐々に、祐澄→女一宮へと移行するばかりでなく、仲澄

→あて宮という恋慕をも、人々の話題の上で、仲澄→女一宮へと変換しているわけだ。これは、『うつほ』後半部が、物語の中心的存在を、あて宮から女一宮へ交替せしめようとしていることの現れであると思われるが、同時に、この移行によって、兄妹恋という禁忌が稀釈されていることにも気づかされる。

## Ⅲ　回顧される仲澄――近澄（ちかずみ）に於ける

『うつほ』後半部では、仲澄・祐澄の弟である源近澄が各所で活躍するが、この人物も、故仲澄の影を背負ってある。

【H】殿かむだちめ、みところ、大将［＝仲忠］、中納言殿［＝涼］と物がたりし給ほどに、こ侍従のみをとと［＝近澄］、たいふなりしは、うちのくらのかみにて、くら人にぞものし給、こじじうには、かたちも心もまさりたる、たぐひなき色ごのみにぞありける、かはらけとりていで給へり。

（蔵開・下／α六三六頁・β一七頁）

先に見た祐澄が、妹恋という点、女一宮恋慕という点で、仲澄の属性を引き継いでいたのとは少しく異なり、近澄は、兄仲澄より「かたちも心も」まさった「たぐひなき色ごのみ」として登場してある。

【I】をとゞ［＝兼雅］、「くら人の少将［＝近澄］の、をとまさり［＝弟優り］になりわかれぬべかめるかな。たゞいまのうへの人は、これひとりなめりかし。こゝろもよげなり。［妻として］たれをかもたる」大将［＝仲忠］、「……少将［＝近澄］はあるまじき心ばへ［＝皇女を得んという想い］なれば、おやなどせいし給なれば、……［親たちが］せちにせめ給なれど、［近澄は］思やまでなん、心ちもしらぬべき物なめり、となんなげかるゝ」をとゞ［＝兼雅］、「じじう、たれよりかは。もし宮［＝女一宮］か」……おとゞ［＝兼雅］、「れいなることなれば、げになげかれぬべくこそは。［近澄は］いづれをか」大将［＝仲忠］、「二の宮［＝女二宮］こそは。……」

（蔵開・下／α六五七頁・β四五頁）

右は、先の【G】と同じくだりであるが、近澄が、皇女を奪取しようという「あるまじき心ばへ」を持ち、親たちがこれを留めようとしていたという話題から、故仲澄が誰を恋慕していたのかという話題へと、やりとりが真直ぐに続いていることに注意したい。

この後、実際、近澄は、女二宮の掠奪をもくろみ、「かたはなれたるむま［＝奔馬］のごと」（国譲・上）とか「わかきものゝくるふを」（同）と評されるほど、ひたぶるな恋の徒として現出する。そして、そのときにも、次のごとく、故仲澄が引き合いに出されている。

【J】宮［＝大宮］、「よの中にくるしかるべきものは、わかき人のすいたる、こにてもたるわざなりや。みぐるしう

いみじき物をみるこそ、いといのちながくなりなまほしけれ。このちかずみといふ人の、わらはよりあやしくすきてみえしかば、そへ物になりぬべしとて、かしこにもゆるしたうばでありしもの、、……そのいふやうは、[近澄]『心ひとつにえたえずは、いかにもいかにもと思へども、おやのさきにいのちなき人あらはなれば、かく申に、そのごとくなし給へとにはあらず、仏神にも、このことなおもはせ給そ、と申させむなどこそ』などいひつゝ。……」……[大宮]「しらずや、その[＝近澄の]いふこと、いとおそろしや。[恋慕の相手は]このなからひにこそはあめれ」　（国譲・上／α六九七頁・β九四頁）

あて宮や仁寿殿女御を前にして、母大宮は、息子近澄のあまりの好色ぶりを託ち戦く。そこで引かれる近澄の発言の中に、「おやのさきにいのちなき人」とあり、これが、故仲澄を指すと認められる。近澄の言は、ひたすら女二宮を想ってやまないが故仲澄の例もあることだからその願いを叶えてくれとせがむつもりはなく仏神にも恋情を晴らして欲しいといっているのだ、と訴えたもの。近澄は、己が故仲澄に比すべき存在であることを自覚しているようである。

このように、「色ごのみ」で「あるまじき心ばへ」を持ち「おそろし」といわれるほど「あやしくすき」たる近澄の背後には、決って、故仲澄の影が揺曳している。この援用法は、禁忌の妹恋に煩悶するという属性を引くものでは、ない。顧みれば、生前、仲澄は、「あやしきたはぶれ人」（藤原の君）と称され、その恋は「ものにくるひたる事」（嵯峨の院）などといわれていたのだった。『うつほ』後半部は、一途なまでに恋に惑乱するという点に於いて、近澄と故仲澄を繋いでいるのである。

さらに、祐澄と近澄とがともに女二宮奪取をもくろむくだりでも、故仲澄が婉曲に想起されている。

【K】おとゞ［＝正頼］、「……我ぬしたちのみ心もしらず、わかきをとこ、女、おやはらからとぐし給ふ、やすく思ふべきにもあらざりけり」との給へば、宰相中将［＝祐澄］、うちわらひて、「きこしめしこりたることやあらん。さやうにすいたる人も、いまははべらぬ物を」と、つれなくいふ。したには、「いかでこのおりに［女二宮を］ぬすまん」とおもひたばかる。くら人の少将［＝近澄］は、物もいはで、「［女二宮が］おりていり給はんほどに、いりふしなん。そゑ［＝それ故］にころされんやは。また、さらば、さてしなん」と思ひおはす。

（国譲・下／α八八五頁・β九六頁）

たとえ親兄弟が周囲にいても、若い男を女と一緒にするのは安心できぬと遠回しに釘を刺す父正頼の言葉を聞き、祐澄は、そうした例を見て懲りたことでもあるのかといい、そんな好き心を持つ人も今はもうおりませんのに、と笑いつつ、心の内で皇女奪取を画策しているわけである。傍線部の「い

まははべらぬ」「さやうにすいたる人」は、故仲澄を指すと認められよう。加えて、その直後に、物いわぬ近澄が、女二宮のもとに押し入って抱き伏せてしまおうと、もくろんでいるのも留意される。『うつほ』後半部は、祐澄・近澄の不穏な挿話を綴るに際し、暴力に訴えかねぬほど女に惑溺するという、その徴として、故仲澄を援用しているわけだ。

## Ⅳ　回顧される仲澄――実忠（さねただ）に於ける

「国譲」巻にあっては、もう一人、その兄弟ではないにもかかわらず、仲澄に準えられる人物がいる。

【L】おとゞ［＝正頼］、「……からうして、とざまにまじらひてもはぢなかりしは、はかなくてまづかくれにき。されば、かたじけなくとも、いまはた［あなた＝実忠は］おやもおはしまさぬを、たのもしげなくとも、との［＝故季明］、御かはりとおぼせ。まさよりは、むかし侍りしもの、かくなり給へる、と思ひ給えん」などの給へば、

（国譲・上／α七四三頁・β一五六頁）

右は、あて宮入内の報に絶望し小野に隠棲していた源実忠が、太政大臣であった父季明の死をきっかけに都の世界へ戻り、叔父正頼と対面したくだり。あて宮の父正頼は、宮廷社会に復帰した甥実忠に対し、己を親と思って欲しく、また、実忠を、「はぢなかりし」「むかし侍りしもの」すなわち嘱望の息子であった故仲澄のように扱おう、と述べている。そして、この言葉を受けた実忠は、あて宮に、次のような文を送るのであった。

【M】［実忠］「……おとゞ［＝正頼］もの給はせしやうに、むかしのじゝうの君の御かはりにおもほしなさば、の給し所へもまかりかへらじ。あすのほどにまかりて、いま、さらば、時〳〵はちかくを」

（国譲・中／α七六五頁・β一八一頁）

己を「じゞうの君の御かはり」と思って欲しいという実忠の言は、つまり、男女の色恋めいた関係ではなく、兄妹のごとき恋情なき関係でありたいと告げるものである。もちろん、これは偽善的な物言いに過ぎないし、そもそも、その仲澄にしてからが妹あて宮を想ってやまなかったのだから、この文言は、決して清廉な申し出とはなるまい。故仲澄の名は皮肉に作用するだろう。

そして、その下心を見透すかのように、実忠の妹である宮の君は、あて宮は「みそかをとこ［＝間男］」を通わしていると罵るのであった（国譲・上、国譲・中）。この宮の君＝宣耀殿女御は、あて宮＝藤壺女御と対立的な位置にいる人物であるから、これを敵視するのは当然なのだが、一面、春宮女御＝あて宮と実忠との関係が孕む密通性をいい得てもいる。

遡って見れば、仲澄の死去も、実忠の隠棲も、ともに、「あて宮」巻で並立的に語られていたのだった。また、両者の恋

情は、ともに、我が身を「いたづら」になすという語を反復させながら綴られてもいた。仲澄・実忠は、『うつほ』前半部に於いてはパラレルな存在者であったと捉えられる。[6]そうであってみれば、「国譲」巻が、物語上に実忠を賦活せしめるに際し、そこに故仲澄を重ね合せ、下心ある擬似的兄妹関係を敷設しているのは、尤もなことであったといえよう。

## V 『うつほ』の指向性

以上が、故仲澄が想起された例、及び、婉曲に故仲澄を指示すると認められる例である。「蔵開」「国譲」巻は、各々、上・中・下巻それぞれに於いて、間歇的かつ恒常的に、仲澄を引き合いに出しつつ、祐澄・近澄・実忠にその属性を重ね合せ、凌辱・姦通を惹き起しかねない危険な男の物語を、新たに紡がんとしているのである。

この仲澄援用法は、最初に挙げた平安後期〜中世王朝物語のそれとは少しく異なっていよう。辿り見たごとく、祐澄の恋慕の対象は、あて宮から女一宮へ、そして女二宮へと移行していた。また、近澄の恋慕の対象は女二宮であり、実忠の恋慕の対象はあて宮であった。【E】以後、近親相姦のモチーフは、微妙にずらされながら、潜在化してしまっていると思しい。「蔵開」「国譲」巻にあって、「仲澄」は、禁忌の妹恋の徴(シーニュ)としてより以上に、破滅性・暴力性を孕んだ、貴女侵犯の徴(シーニュ)として招喚されてあるのだ。

ただ、いずれにせよ、この造型法が『うつほ』後半部で十全に機能したかといわれると、確かに、にわかには肯い難い。祐澄・近澄・実忠があて宮・女一宮・女二宮に迫らんとする一連の挿話は、物語に新たな展開をもたらす原動力にはなり得なかったともいえる。[7]だが、それを、構想の不燃焼と捉えるべきではなかろう。『うつほ』とは、そういう物語なのだ。この物語では、挿話は、挿話としてある。

或いは、敢えて、こうした手法が物語に新局面をもたらさなかった理由を説明するとすれば、それは、これらの男女の間には、密通も、情交さえもなかったからだ、といえようか。仲澄をはじめ、祐澄・近澄・実忠、或いは弾正宮・五宮といった男君たちは、狂態を呈するほど女に惑溺し、狼藉に及びかねぬほど恋に憑かれてあるのだが、しかし驚くべきことに、『うつほ』という物語には、ついに、一つの密通も、一つ強姦(レイプ)も、一つの近親相姦(インセスト)も、描かれなかった。祐澄の恋慕の対象が、妹あて宮から、仲忠の妻女一宮へ、そして未婚の女二宮に移行せしめられていたのは、この物語の潔癖さ（もしくは限界）を示しているようでもある。

蓋し、作り物語なるものが、構想の駆動因、長編化の起爆剤として、密通・強姦を方法化できるようになるには、[8]なお、『源氏物語』の出現を俟たねばなるまい。

※引用する『うつほ』本文は、尊経閣文庫蔵前田家十三行本を底本とする以下のテキストに拠った。

α▼室城秀之ほか『うつほ物語の総合研究1 本文篇 上・下』（勉誠出版・一九九九年）

β▼野口元大『校注古典叢書　うつほ物語 1～5』（明治書院・一九六九～九九年）

ただし、句読点・濁点・鉤括弧の付し方、校訂の仕方は、私意によるところが多い。また、……は省略した箇所、［　］内は私に補った語句である。なお、右α本・β本それぞれの頁数を（　）内に記した。

註

（1）他系統の『狭衣』諸本も、この部分を有している。

（2）この部分を含めたくだりは、或る種の系統の諸本のみが有する独自本文。次の論稿を参照。

片岡利博「深川本狭衣物語の本文―巻一冒頭の脱文をめぐって―」（『文林』第三四号・二〇〇〇年三月）

なお、傍線部の「宰相中将」は、他本を参照し、「さい中将」「さいこ中将」すなわち在原業平と解すべき旨、次の論稿が説く。

後藤康文「もうひとりの薫―『狭衣物語』試論―」（『研究講座 狭衣物語の視界』新典社・一九九四年）

（3）『有明の別れ』「いはでしのぶ」等。

なお、後代作品の『うつほ』受容については、以下の論稿を参照。

中野幸一「うつほ物語の享受と伝来」（『うつほ物語の研究』武蔵野書院・一九八一年）

辛島正雄「『いはでしのぶ』の影響作―『恋路ゆかしき大将』と『風に紅葉』と―」（『中世王朝物語史論 下』笠間書院・二〇〇一年）

（4）「ありや」以下「あらずや」「見え給や」の「や」は、詠嘆の終助詞で、現代語の「～のよ」「～だわ」に当るもの。『うつほ』では、特にあて宮が、これを多用する。

（5）兄から妹への迫り寄り、および「琴」を描いたこのくだりは、『伊勢物語』四九段・『源氏物語』総角巻と相関連するものとして様々に論じられている。以下の論稿を参照。

片桐洋一「源氏物語における伊勢物語」（『解釈と鑑賞』一九六八年五月）

同「物語絵と物語本文―もう一つの場合―」（『源氏物語以前』笠間書院・二〇〇一年）

後藤康文「『室の八島』の背景―『狭衣物語』試論―」（『国語と国文学』一九九七年八月）

長谷川佳男「引用本文と異本を生む想像力」（『論叢狭衣物語3 〈引用と想像力〉』新典社・二〇〇二年）

池田和臣「源氏物語の引用表現における異文―引用本文の行方、引用表現の含意―」（『論叢源氏物語4 〈本文と表現〉』新典社・二〇〇二年）

（6）寺田透「あて宮・実忠・仲純」（『平安時代の物語』福武書店・一九九〇年）も、仲澄と実忠を並立的に捉えている。

（7）『うつほ』後半部に於ける祐澄・近澄については、以下の論稿を参照。

野口元大「「蔵開」と「国譲」の世界」（『うつほ物語の研究』笠間書院・一九七六年）

中野幸一「うつほ物語 第二部」（三谷栄一編『体系物語文学史3

物語文学の系譜Ⅰ平安物語』有精堂・一九八三年）
拙稿「『うつほ物語』二者一対の法」（『詞林』第二九号・二〇〇一年四月）

（8）物語の方法としての強姦については、以下の論稿を参照。
今井源衛「女の書く物語はレイプから始まる」（『王朝の物語と漢詩文』笠間書院・一九九〇年）
同「物語構成上の一手法―かいま見について―」（『王朝文学の研究』角川書店・一九七〇年）

［付記］

なお、本稿で考察した諸例の他に、故仲澄を指すといわれているものが、二例ある。

【X】なかたゞ、なかずみの君を［誘って］、「いざ給へ。なかたゞ、せちなる人［＝母俊蔭女を］こよひまいらするを、御かげにかくして、いていりたまへ」　なかたゞみ、「たれぞや」　［仲忠］「いざかし」とていて、さてやむごとなくむつまじき人［＝仲澄？］にき丁もたせて、ち、おとゞ［＝兼雅］の御くつもたせて、「はやおりたまへ」と［俊蔭女に］いふ。
（内侍のかみ／α四五九頁・β七三頁）

「内侍のかみ」巻は、「あて宮」巻で語られた源仲頼の出家が踏まえられていない等々矛盾点が多く、ために、成立や作者について様々に論じられて来た（野口元大「『内侍督』の定位と「原＝吹上下」」『うつほ物語の研究』笠間書院・一九七六年、片桐洋一「『うつほ物語』第一部の表現と構造―主として待遇表現を中心に―」『源氏物語以前』笠間書院・二〇〇一年、室城秀之「作られた過去―「内侍のかみ」巻における〈吹上の宣旨〉をめぐって―」『うつほ物語の表現と論理』若草書房・一九九六年）。

右の「なかずみの君」については、諸註、仲澄死去が踏まえられていないと見、「不審」としたまま措くか、「祐澄」に改訂するかしている（角川文庫『宇津保物語 中』一四七頁脚注・三九三頁補注参照）。また、続く「なかたゞみ」も、会話の順序を考慮して、「仲澄」もしくは「祐澄」に改訂されている。やはり、ここは、当時の物語制作の次第を鑑み、「あて宮」巻に於ける仲澄死去を知らぬ人間が「内侍のかみ」巻を書いたと理解して、二箇所とも「仲澄」としておくより他あるまい。

いま一つは、『うつほ』の掉尾たる「楼の上・下」巻の例。

【Y】侍従のめのと、いふは、さがの院のみこの、兵部卿にておはせしが御むすめなり。こぐゑん侍従の、わらはにてしのびがたきなりし［。］一宮［＝女一宮？］の御はらからの宮の、いとしのびて、［侍従の］かたちいみじくうつくしげなれば、かよひ給ひしに、ちをたゞしばしまいりけれど、めのと、すべきさまならずとて、名はつきたれど、宮のいとらうたきものにし給へりける也。
（楼の上・下／α九七三頁・β九六頁）

「兵部卿」でいらした人の娘「侍従のめのと」が紹介されるくだりで、傍線部「こぐゑん侍従」が、故仲澄のことだと考えられている。しかし、これは、角川文庫はじめ校注古典叢書・新編日本古典文学全集等に於ける改訂本文である。前田本では、本行本文「こく術侍従」とあり、その右に「ゑむイ」と傍記されていて、これを根拠に、「術は衛の誤字でその下に撥音無表記があり、故源侍従と認める。仲澄の元服前の秘かな愛人。」（校注古典叢書）と考えられ、本文が整定されているのである。

前田本以外の諸本を見ると、例えば、浜田本では「こゝ術侍従」、岡本本では「兵衛侍従」、新宮城書本では「こく術侍従（右に「ひやうゑイ」と傍記）」となっているが、いずれにしても、要領を得ない。そもそも、このくだりは、前後の文脈も不明瞭である。「侍従の乳母は、故源侍従が、童のころ忍びがたきであった者なり。」と切るのが妥当なのだろうが、「故源侍従が童のころ忍びがたきであった、一宮の兄弟の宮」と、以下に掛けて解することもできよう。「侍従の乳母は、故源侍従の女童で」と読む向きもある。また、「かよひ給ひしに」の下には、脱文が想定されもしよう。今、新見を呈示できるわけではないのだが、いずれにせよ、「こく術侍従」が故仲澄を指すとすると、この想起法は、本稿で考察した諸例とは全く異なった種類のものだといわざるを得ない。ここには、祐澄も近澄も実忠も現出せず、しかも、「故源侍従」云々という回想は、以後の物語展開や人物造型に如何なる効果も及ぼしていない。ここに、敢えて故仲澄が持ち出される必然性がない。更なる検覈を要する箇所である。

（かとう・まさよし　国文学研究資料館助教授）